

西洋現代思想にみる「身体性」の問題と美容文化史研究

—人類学的視点からのアプローチ—

富金原 光 秀

Body of Issues Seen in Western Contemporary Philosophy and Beauty Culture History Studies

— Approach from the Viewpoint of Anthropology —

FUKINBARA Mitsuhide

キーワード：身体論、美容文化史、文化人類学

はじめに

国連教育科学文化機関ユネスコの3大文化遺産である記憶遺産（文部科学省所管）は、人類が共有すべき記憶を「記憶遺産プロジェクト」として後世に残すべき資料を保存する事業である。これまで、アンネの日記やベートーベンの直筆の楽譜、フランス人権宣言の資料などが登録されているが、今年の5月に日本で初めてこれまで無名とされてきた山本作兵衛の絵画や日記が記憶遺産に登録された。半世紀にわたり石炭の仕事に携わった作兵衛は、「(戦死した)子や孫にヤマ(炭坑)の生活や人情を残したい」「夜警の仕事の合間、じっとしていると、長男のことが思い出されてならない。気を紛らわせる為に記録画を書く」とつれづれに描くようになり、80歳を過ぎるまで、自らの経験を基に戦後炭坑の様子を描きつづけた。作兵衛には激動ともいえる社会の変容の中で、時代に翻弄され、消えていく炭坑の姿が長男と重なったという。この記録画には産業革命によって西洋技術を導入し、発展を遂げてきた当時の日本の近代化を支えてきた基底部分としての炭坑労働が現場を通して記録され、坑夫の生活や、炭坑社会の労働実感といった経験したものにしか表現できないリアリティが独自の視点で描かれている。常に危険

と隣り合わせであった状況下でどのような知恵をもってそれを乗り越えてきたのか、詳細に記録されている。この記録は、とりわけ現況のようなダイナミックに変化している時代に、我々の中に記憶される事が困難ともいえる状況において、その「生きた記憶」を後世に残すことにユネスコは作兵衛を選択した。近年の世界遺産をめぐる動向で興味深いのは、近代に構築された廃墟物を文化的資源として評価していることにある。近代の重層性を詰め込んだ歴史的根拠を正視するその契機となっている。^[註1] NHK 番組クローズアップ現代の中で、ユネスコ記憶遺産事務局のスプリンガーは、記憶遺産のもっとも重要な要素として「コレクティブメモリー（国境や時代を超えて人類が共有すべきもの）」を挙げている。このことを踏まえれば、炭坑の記憶が登録された意義は、今日のエネルギー問題と無関係ではない。見通しの立たない不確実性の状況下、一方で新たな時代の輪郭が形作られ、国際社会のなかで文化や環境に至る人類学的視野が求められているのではないだろうか。その立場にたち、我々があえてこれまでさけてきた多様性を正面から捉え、向き合っていくことで身体化していくこと。そして諸問題を歴史的な時間軸で見る視野をもち、局所的・多様な空間軸の歴史を普遍性の枠組みで捉え、相互関連性の中に組み込むことで「統合できる知識」を基盤として、現代社会に応答できる、あるべき解を見出

していく。専門分化された知識を深めても、それを横断的につなげることを通して意義をもつものである。このように、人間社会や日常生活にどのような影響を与えうるのかを考え、判断していくことは、これまで主に哲学や、人文科学の領域が担ってきた。このような思考力や判断力に関わる「学識」が、一定の時間軸の中で体験の厚みを賦与し、どう内面化するかといった、いわば身体化していくための知の訓練であると捉えることができれば、単なる情報知との差異を見出せよう。

創造や表現を教育的観点で捉えると、「言葉による教育」に汲み尽くせるものではなく、身体的性質が不可欠である。ましてや成長過程は重層的、かつ複合的プロセスを経過していく。成長世代が作品制作やコンテスト等を通して身体経験と感動体験を積み上げていくことで「自身の表現」に至り、結果的に成長を支える自信となるのではないだろうか。このような知見から、実践経験を通して獲得する「身体性の問題」をさまざまな思想家の言説をとりあげ、人類学的視点に立脚しながら、今後の美容実践教育、美容文化史研究に適用する術について、考察を試みていく。

西洋現代思想にみる「身体性」

身体の問題は目に見える身体の問題に留まらず、生まれてきてから習得した言語や、外界から受けた様々な記憶によって規定され、膨大な量の次元をかかえている。古来人間はさまざまな面から「身体」というものをどのように認識したらよいか論じてきた。現在は西欧的に近代化されて以来、精神・思考機能を偏重してきた視点の反省から1960年代に文化革命やカウンターカルチャーの動向と連動した身体論は、精神と肉体の両者を切り離しえない存在の総体として学術界に留まらず、世論に至るまで広く浸透していく。それに加え、インターカルチュラリズムの動向が加速されている今日においても、生活、制度、思想を総合する文化の在り方によって、身体観が表出している。文化的な枠で捉えれば、西洋の伝統では主体

としての現在が世界と関わっているとする過去と未来への時間的経験に依拠している。一方日本においては、客体として世界に内在しているという捉え方が伝統にあり、むしろ受動的認識による空間的経験としての身体感覚がその背景にある。^{〔註2〕} 両方の論理を踏まえ、これを社会的に捉えれば、我々の身体は生活の中の空間を占め、時間軸の中で生活をしている状態にある。その中にある身近な問題として扱うことに視点を置くことで、これまで我々が物事の前提としている事柄を見直す機会として身体を問題化していく。

フランスの思想家メルロ＝ポンティによれば「身体」を、肉体と心的なものを含む全体を構成する諸機能の総和としてみる。言うまでもなく目に見え、触れることができるものとして捉えている。この機能は、行動する身体、知覚と表現の主体としての身体であるとした。知覚によって開示される事物の意味は、多少とも多義的であったり曖昧であったりする。こうした性状は、認識にとっては、不純であろうが、むしろ知覚には、経験の豊かさや如実さを示す。知覚の様々な次元の换位可能性の経験そのものである。このような可動性のある経験の余地を身体によって絶えず開いていくことである。^{〔註3〕}

1. 鏡と「身体」の関係

「知とは、行動した人々の状況のうちにわたしたちが身をおくことであり、想像のうちの行動である。また、行動とは、知を予期することであり、…これによって、生の歴史家になれる。」^{〔註4〕} そこで、メルロは自らを客観化するまなざしとしての身体性をもつことが主体の形成にとって不可欠であることを示している。「独我論的に知覚された事物が〈純粹な事物〉になることができるのは、わたしの身体が魂をもつ他の身体と組織的な関係を取り結ぶときだけである。」^{〔註5〕} この二重性にふれ、見ること、見られること、触れること、触れられることといったいわば鏡の関係をモデルとして示したのである。そして主体と客体との揺らぎの中で互いにその可能性の条件を提供し合う相

補的で可逆的な関係として構成している。視覚と触覚の二重性として、見て、触れるのは、同一の身体であり、同じ世界に属している。触れるもののうちにおける見えるものと、見えるもののうちにおける触れるものは互いに二重になるが、一方、互いに混同されることもない。この二つの部分は、〈全体的〉な部分であり、重ね合わせることができないものである。「視覚という語の二重の意味にあるように、わたし自身が、外から見られる。わたしがある場所から他者を見ると同時に、他者はその見られた場所において、わたしを見るのである。これは一つの身体によってみられる運命にあるということである。」^{〔註6〕}「これらは、互いの間に、根本的な分裂あるいは、分離の存在によって可能となるのであり、いわば横断的にわたしの身体のさまざまな器官の間の交通を成立させ、一つの身体から別の身体への推移性の基礎となる。」^{〔註7〕}「見えるものに対する見えるものの絡み合いで私の身体と他者の身体を貫き、生気を与える。」^{〔註8〕}このような身体は、「客体」の秩序に属すると同時に「主体」の秩序に属するもので、「可視性」そのものである。このことは、存在の曖昧さでもあり、それぞれの側面が他の側面を呼び求めるものであることを意味する。

向い合せた二枚の鏡を考えれば、互いの映像が無限に映し出される。見る者は自分が見ているもののうちに取り込まれるが、見るものが眺めるのは、見るもの自身である。この一種のナルシズムの能動性が同時に受動性に等しい意味がある。この事は、ラカンが、「鏡像関係の問題」の中において指摘している。^{〔註9〕}このように思考が自己との関係であり、世界との関係であるとともに、他者との関係であるならば、この三つの次元が成立することで思考が形成されていくと考えられる。この関係性の中に常に置かれた実践性を踏まえた身体とは、「根源的な指向性」であり、「ある運動が習得されるのは、身体がその運動を了解したとき、つまり、身体がそれを自分の〈世界〉へと合体した時である。」^{〔註10〕}と述べているように、身体が視覚と触覚を通じた運動を把握し、運

動を理解することであり、結果的に、それは習慣の獲得として運動の意味を把握する。この習慣の身体性は、技術習得を例にあげれば、日々の練習を重ねていく習慣の獲得により、後に、自然に高度な技術を習得していく経過であり、いわば可変的な射程を記録し、表現し続ける実践能力と考えられ、結果的に他者（クライアント）へ還元される。そもそも訓練や稽古など何度も繰り返し反復する身体的体得は継続としての習慣そのものである。その意味で身体は、表出空間であり、表出の運動そのものといえる。その身体に意味を見出していく事が身体論の中心的問題となる。もっとも知覚することは、運動を出発する事で理解される。運動は、自己に入り込むことと、自己からであることの同一性であり、内的に感じ取られる運動感や触覚性力覚はまさしく体感的であり、感情や情動や痛みが介在する。訓練や練習による身体動作は、反復されることで認知され、これら触覚を通じた身体運動認知が、その機能を果たす。したがって志向的態度として、例えば「わたしはできる」とするならば、それは経験そのものを示しており、「潜在能力」や「実践能力」という観点から理解していく必要がある。換言すれば、それを足場に先の事象がおのずと見えてくるある種の経験の運動である。この運動は、とりわけ職業訓練において突出した学的（技能獲得）方法論として息づいている。「知る」ことを強調せず、行為によって立ちあがる事象に感性的領域が内在し知的機能を果たしていくプロセスである。つまり「知」が、行動＝認識の図式によって、独自のなもの、おそらくは、ラディカル（原初的）なものと認められるべき実践知という理念を示す。このいわば運動における習慣の発展性が、新たな対象やスキル、諸活動を日常生活に取り込みながら、身体と世界との関係性を変形し、アイデンティティを形成していき、まさにその習慣によって、「わたしはできる」ようになるのではないだろうか。

ベルクソンも、身体において習慣と運動の二面性を主張する。「習慣的に組織された諸々の感覚—運動系の総体によって構成される身体の記憶力

とは、瞬間も同然の記憶力である。」^{〔註11〕}として
いる。これについて、ベンヤミンも「触覚が備わ
っていなければ、空間という概念すら認識でき
ない。触覚は、身体的な知覚によって習慣という
手段をとり、それは日常的な経験に基づいてい
る。」^{〔註12〕}と述べている。知覚の変質を促す触覚
がイメージの痕跡に纏わる「記憶」を生成し、身
体の運動能力との関連をもちはじめると。そこで記
憶と身体の関係について触れる。

2. 記憶と「身体」

「記憶における身体の機能は、運動の端緒でみ
られる投射と同じ機能を備える。投影・投射の問
題は、鏡をモデルとして論じられ、鏡は見ると同
時に見られる回路をもち、すでに前述したように、
一方の眼と他方の眼・一方の手と他方の手の間に
反応が起こり、〈感じ〉〈感じられる〉といった内
在的な関係が生じるのである。同様に記憶に関わ
るイメージも〈外なるものの内在〉〈内なるもの
の外在〉である。こうしたことが可能になるのは、
「感ずる」という二重構造によってである。」^{〔註13〕}
とメルロは述べる。

ユベルマンは、メルロと同様に現在を直下で支
える歴史性を考察するにあたり、ラカンによって
読み直されたフロイトの精神分析を主たる準拠枠
としながら、身体に表出される「症候」という概
念から、その「記憶」の次元における歴史性を
主張し、人類学的視点を導入している。ただ、彼
の概念は、ベンヤミン、アインシュタインなどの
言説に依拠している為、フロイトが、自己を転移
の場としているのに対して、他者を転移の場とし
ている。彼は転移と視覚の関係について、記憶痕
跡の問題を取り上げ、「症状とは残存であり、記
憶である。」^{〔註14〕}と述べている、このユベルマン
の言説は、見るというより、見つめ返されるまな
ざしの症状が、イメージの真正とそれが開く歴史
の問いを保証するものである。そして「アナクロ
ニスム」という概念を持ち出し、重層的な時間の
モンタージュ（コラージュ）として時代遅れのよ
うな技術に戻ったりすることで、残存の長い変化

持続と同時に歴史的時間の不連続性を言い表す仕
方を提示している。それは、無意識のあらゆる形
成物の中で、作動する重層決定の時間的様相とし
て立ち現れる本質的な「記憶」の部分であると規
定している。

3. 「身体」の歴史性

メルロは、一般に身振りを含めた身体の使用に
ついて「或る領野を開き、或る秩序を開始し、或
る制度あるいは或る伝統を創設する」と述べる。
つまり最初（過去）の身振りと後（現在）の身振
りは、比較されうるものとなるとして、これを彼
は、「生きた歴史性」^{〔註15〕}と呼んでいる。歴史の
多元性を理解し、秩序が一定に結びつき、現在
と過去の間に関係のある理解をすることで、わたした
ちの視点がときに過去のイメージを転倒させ、過
去が現在と同じように、文化の独自の領域とな
り、たえず問ひかけが繰り返されていく。もし
も、この問ひのうちに、一貫性のあるひとつの普
遍の歴史総体を構成していくとすれば、その意味
において歴史とは実践活動の生きた痕跡であるとい
える。「歴史が生のある場となるのは、理論と実践
の対立のうちに、文化と人間の仕事の対立のう
ちに、さまざまなエポックの間に、さまざまな生
の間に、意図された行動と、こうした行動が、登
場する時代の中に、偶然でもなく、ある親和性が存
在する場合である。歴史的な行為は「公共的な持
続」のうちに組み込まれる。」^{〔註16〕}このように歴史
を理念のみで把握せず、活動の痕跡を能動的に
捉えることで歴史は厚みを増すのであろう。この
点についてウェーバーによれば、知の態度に絶対
的に対立しながら、暫定的で条件的である態度、
実践の態度を採用した。この態度においてわた
したちは現実的なものに直面するのであり、出来事
それ自体を評価するという無限の課題を意識化す
る事に、彼自身の立場をおいた。つまり知的な核
としての「実践」において、わたしたちの決定は、
常に正当なものであり、また正当でないものとし
て、責任と意識の倫理を両立させた。ゆえに人間
は歴史的な存在であり、実践は知と理論を呼び求

めると語っている。この態度はウェーバーの一生を貫く思想となる。^{〔註17〕}「個々の行為者たちの残した仕事（遺産）の前提のゆえに築き上げられ、そして同時代または後代の行為者の前提になっていく。こうした前提の連鎖は、それを生み出した歴史環境や時空を超えて伝達可能な理念性となるのである。沈殿・蓄積によって理念性が歴史的に生まれながらも、さらに歴史性を超えた存在となっていく。」^{〔註18〕}これらのいわば西洋現代思想に特有の「身体性」の捉え方を、現代に適用すれば、学習者は伝統的な技術の「型」をはじめ、先人や先輩の作品やイメージを模倣することで、新たな技術を獲得していく事に他ならない。これら作品の系譜がのちに続く作品を保障しながら、新たな作品を構成する。その意味において、美容活動は〈表現の動き〉であり、試行錯誤の末に到達し、結果的に、自身そのものに表現の変化が見られ、変容を伴いながら制作した作品の系譜は、突き詰めれば美容文化史における様式の制度そのものであるといえる。ここでの制度とはメルロが考えている「主体が何か新しいものを作り出すための前提として、その可能性を示す規定」であり、また歴史的な伝統を踏まえ、実践活動を可能なものにする。これら一連の行為は、文化によって形成されたものを引き受けることである。歴史的に受け継がれてきた技術姿勢、身振り、言語を内在させた身体によって、新たな「意味」をも見出し、結果として「型に拠って型を脱する」ことを可能にし、他者との公共的な言語を通し、イメージを理解することで、それを他者との時間性及び空間性の場において伝播していく。ヴァールブルクによれば、このイメージによるイコノロジーを「人間の身振り表現の歴史心理学」とか、「文化学としてのイメージの歴史的研究」と呼んだものである。^{〔註19〕}姿勢や身振り表現が歴史のなかで遍歴する過程を、時代やジャンルの境界線を越えて、彼は現実の人間社会の直接的な連関の中で明らかにしようとした。それは、冠婚葬祭や生活習慣を通して、いわば近代の美学の枠を超えたところで、イメージの機能を

イコノロジー学問としてフィールドワークによる研究を行ったものである。確かに技術を習得する以前と以後では、身体図式のいわば組み換え・更新によって、道具の意味や姿勢の意味さえ、随分と異なってくる。これは言葉による指令によって運動的意味を与えるものであり、身体と言語との異なる次元間の関わりを統一させていく図式でもある。「こうした言語と身体境界が曖昧なのは、それらが常に、相互構成的な創造的循環のなかにあることに他ならない。これらが経験に包摂されることは、文化的世界を要請する。」^{〔註20〕}

メルロをはじめとした論者の言説を手掛かりに見てきた、見るものと見られるもの、触る、触られるといった主観と客観の相互作用や自己観察は、「内省の人類学」に通じる視点であると考えられる。つまり、調査や実践において自己を他者にいかに反映させるかといった自己投影法である。ヴァールブルクやベンヤミン、ユベルマンに共通するアナクロニズム^{〔註21〕}（時代錯誤すなわち現代を過去の対象にもちこむ行為）の概念は、新たな発見の機会をもたらすと捉えられる。そもそも創造や表現の歴史の中には、アナクロニズムが内在していよう。とりわけ創造は「記憶」の構造物であると言える。それは変容を繰り返しながら、ユベルマンやヴァールブルクのいう症状（感染）のごとく断続的に継承される。形象が、「記憶」に関わるものであるとする見解は、前述したように、フロイトの精神分析学をひとつの立脚点としている為、フロイトの症状モデルによって身体化の造形性と残存の時間性を同じ一つの「情念定型」として統合することを可能にする。その意味において、症状形成とは、形態として具現化された「残存」であると定義できよう。それは、例えば葛藤等によって、また矛盾した運動によって作用を受ける形態である。^{〔註22〕}このフロイト的な精神分析を導入する議論は、広い意味での「記憶」の次元を含ませた歴史の問題に関わってこよう。ヴァールブルクは、「残存」というヒューリスティックな概念の中で、しばしばそれを「身体化」と名付けている。彼は、ルネサンス人の心理のなか

に生きる古代の記憶の内実を歴史学的な実証によって明らかにしようとした。彼は、その古代記憶を通して髪の毛や衣装によって感じられる一連の動きにとんだ身振りによる身体表現の中に伝承形態を発見する。彼は、その身体表現を「パトスフォルメル（情念定型）」と呼んだ。そこに複雑さと推積ゆえのアナクロニクなものを見出している。「ボッティチェッリの衣服や髪の中に古代の情念定型が残存している。衣服や髪といった非常に可塑的な物体の中にその痕跡が残る。」^{〔註23〕}と述べている。もっとも日本においても古来、万葉の時代には、髪を女性のもっとも艶なるものとして、美の象徴として捉えるようになり、身体の一部である髪が媒介（伝承形態）となり歌に生命を与えてきた。髪を歌い上げることで主観的・客観的な心情表現を用いなくても、情念を表すことが伝承され、その諸相は、大和・奈良時代へと引き継がれた。源氏物語においても、髪や化粧が主として儀式の中において記述され、成長を祝ったとされる。江戸時代においては、現代の七五三の原型である儀式を執り行う際に、髪の間髪が残されている。^{〔註24〕}そこで人類学的な視点から、この儀式や儀礼的行動を通じた慣習に着目し、美容文化との接点を見出していく。

美容文化史の人類学的視野

人生の節目や区切りとして、伝統・歴史文化の儀式に焦点をあて、集団的なコスモロジーを前提とした、現代に受け継ぐ七五三・成人式・結婚式・葬式に加え、入学式・卒業式等に至る美容文化と深く関わる儀式の現代的な表象を、文化的儀式と相対化していくことで、古代～現代の身体的な比較から文化的差異を抽出し、公共領域を踏まえた現代美容文化の中で考察する。生物学的な身体のみならず、感覚としての身体、症候、美容やファッション、身だしなみ、ダイエットに至るまで、身体を知覚する際に関わってくるあらゆる文化的範疇は、社会をみていく上で有効であり、時間軸を通して、密接な相互関係をもつと考えられ

る。日常生活の「身体」は、病的症候である以外、つまり健康である状態であれば、さほど意識化しない。ただ、美容〈ヘア・メイク等〉やファッションに関わる際には、多くの人が自身の身体に対して大なり小なり意識化するものである。身体は現代における文化的、社会的な価値観と密接に結び付き、人類学的研究の課題となるものである。かくして、美容文化史を「身体」、歴史体系的な「知」として分析・統合し、時間モデルを通じていわばテキストの再構成・再構築に焦点化し、一定の美的規範をもたらしことへの研究を含め、新たな美容研究分野としてのフレームワークを示してみたい。

現代、我々の身体は「過剰」に進展している個人化の傾向によって、集団的なコスモロジープロセスを失い、情報知を通じて向き合いながら、明白に、何らかの意味付与の必要性が強制的に駆り立てられているように思われる。歴史が全般化したアナクロニスムの様相を呈し、意味付与を過剰なまでに要求される今日において人類学的次元から美容文化論を論じていく。

人類学では、アーカイブな社会をそのフィールドワーク等により調査するため、自己や身体をどう捉えるかという身体観については、近代欧米社会のその在り方に対して異なった解釈をもっている。古来より現代に至るまで、人間のライフサイクルである誕生、祝儀、祭祀、卒業、成人、結婚、老い、死（葬式）といった習俗は実質的に美容に関わりの深いもので、とりわけ密接に「身体性」と関わりをもってきた。人間の成長過程の時間軸に一定の区切りをいれていくこのような節目には、古来から、美容創作による身体装飾や服飾を施し、さまざまなライフサイクルにおけるイベント〈行事〉が用意されてきている。このイベントによって、人々はメリハリのある日常を求めてきたとされる。そして区切ることで流れる時間に意味が付与される。このコスモロジープロセスの経験や儀礼・儀式を実践調査によって研究することは文化人類学の大きな特徴のひとつであることは周知である。この儀式・儀礼の歴史的な意味・

意義を探求し、その社会的なつながりとしての身体的意義や、装飾や服飾としての身体をどのように形づけ、意味づけてきたのかを問うことは、美容文化の新たな研究視点であると同時に、このような儀式が今日において希薄化・軽薄化し、時に社会問題となり、あげくには不要論まで取り上げられる現況と比較することの教育的意義を問う事でもあろう。「卒業」や「成人」という儀式の意義を再区分・再構成し、統合化する事が可能かどうか。とりわけ青年期は、精神的にも不安定な状態が常であり、危険や失敗を伴う年代である。一種の「思い込み」から、予期せぬ事態に巻き込まれ、フラストレーションにひしがれた青年世代が、自己調整できずに、欲求不満の末に自我を崩壊し、症状として精神的にも不適応現象を引き起こしたりもする。現在の自身が置かれた状況を俯瞰で捉え、自己を客観的に理解できるか、できないかですの後に大きな影響も出てくる。

フェネップによれば、成人儀礼が、社会的には、人生の節目で経験する通過儀礼であり、その構造は、①分離と②過渡と③統合の3つの一連のプロセス局面からなると指摘する。^(註25) それまでの日常生活での「子ども」という状態から分離し、さまざまな試練をとともなう過渡を経て、今度は「大人」という状態に統合されるというわけである。アーカイックな社会において②の過渡期に関わる身体を傷つける行為や、精神的な苦痛や恐怖をあたえる儀礼・儀式は、一般的な現象であった。とりわけ、髪の手、ボディアート(メイク)、皮膚、耳(イヤリング等)に至る加工等の身体変工ともいうべき創造行為をもたらす。その意味でこの過渡という境界には、動態に伴う創造性の可能性が備わると仮定できる。一方それとは逆に、子どもから大人に移行する過渡期に位置する人間は、その境界の曖昧な状態にあるがゆえに、危険な存在でもあるとして、その回避を理由に儀礼を執り行うとされる。さらに重要なことは、この儀礼を真摯な姿勢をもって無事に遂行するための責任を社会の成員たる大人がもつということである。このことは近代化の名のもとに儀式を形骸化させ

てきたであろう我々側に省察の余地が残されていないだろうか。

鏡と「身体」の関係の中で見てきた事は、鏡面の向こうを見る自己、すなわち主体がその両義性や多様性の間隙に揺れ、いわば可逆的な変容をもたらす分裂的共存の拮抗であった。このことは、まさしく成長世代の身体経験や美容経験そのものではないだろうか。鏡面に映る技術者としての私がどのように写るのかを省みる自己は、努めて客観的であろうとしている。この他者のまなざしを帯びた客観的な主体として私を問うことは、職業上の関係的な構造に参与する一種の変数的な存在として、意識の俎上にのせることである。このように視知覚と触知覚は、分裂的共存のうちに持続的にためられている。美容技術を行う過程では、技術者とクライアントの双面的な関わりの中で、両者が一定の緊張を保ちながら、外面(及び内面)を変容させていく。実際、美容業務実態における技術者の内的な揺らぎは、相手の気持ちや要求に答えきれないというジレンマの中にある。このジレンマを解消していく際にクライアントに対応していく必要な知識は、技術の他に生活習慣、言語、風習、身振り、価値観と挙げればきりが無い。このような実践教育における技術や知識の構成要素は、その習得を通じて、蓄積した知識を現実の社会生活において統合し、さまざまな問題に直面し、状況判断と解決に対処していく能力となるものである。

美容文化史は我々が想像している以上に奥深いものであろう。今日の美容は身体と空間における創造性や加飾性を軽視してきてはいないだろうか。今後、美容のための文化人類史、民俗・装飾史等を語る視点があつていい。本論ではそのフレームワークを示したに過ぎないが、この身体の創造をめぐる美容文化史については、残された研究課題としていく。

結び

人類の文化は、その歴史における記憶の技術伝

承と経験知の集積であり、実に多様な側面を持っている。しかしながら近代文明においては、日本の西洋化に伴って、ある種の歴史否定や歴史不在を露呈させてきた。今後、作兵衛画に見てきたように、歴史を肯定の方法として転換していき、政治史のみならず、文化史を積極的に我々の知識基盤の中に導入していくこと。人類学的視野から、身体をめぐる創造的記憶の歴史を導入することによって、我々に「身体」を可動していく準備が整い、現代を直下で支えていく「生きた歴史の運動」^[註26]の契機となりうる。

メルロは、メタ統一性を失わせるに至った歴史について、身体を携え、鏡をモデルにイメージの歴史性を思考した。今日において、「知」が表面的なものにとどまっている現代の状況の問題点を鑑みれば、そもそも合理的論理に即したシミュレーションを自由に処理していく事（予測）に関わる知識は、「思い込み」や「思いつき」の域に過ぎず、予測不可能な状況が起こりうる現代の状況において、この論理は袋小路の感じがあり、ある種の知的価値基準の転換が迫られる。本論ではその知識基本原理として、身体性を通じた人類学的視点に求めてきた。その意味においては思想・哲学も、〈問いかけ〉を仕掛けとして残していく活動である点において、蓄積されるものではない。進歩には蓄積が不可避であり、蓄積なくして学習はない。これまで考察してきた、身体論によって人類学的な実践の態度からラディカル（根源）な思考と実践力を求めることで過去（作品等）を現代の知性に適合すべく、アップデート（上書き）していくためには身体の創造をめぐる歴史から学ぶことが求められ、このことは今日的課題として要請されよう。もっとも歴史は、行為の因果性に律せられた面をもつ。しかし、同時にそれが多くの創造と表現の論理に支配されることもまた事実である。この必ずしも一義的でない意味の鏡像関係を作り上げる点で歴史はまさしく表現であるともいえよう。そして、本論で考察してきた「身体性の問題」の中において、新たな作品を生み出す創造性としての存在価値が歴史の作品にあること

が確認できた。そもそも、過去たる歴史をイメージし、編集的に構成して作り直し、現代に適用していく行為は、人類の根源的な営みであり、歴史の相続人たる我々の生きた歴史そのものであるといえる。そのことが人の行為から生成されるイメージとして記憶の中に宿り、引き継がれていく事によって新たな意味をもつことが今回の考察により確認できた。この“文化の歴史性”を、熟慮していきたい。

註

- 1) 有馬学『消滅した〈近代〉と世界記憶遺産』中央公論社、2011、p.219
- 2) 湯浅泰雄『身体論－東洋の心身論と現代－』講談社学芸文庫、1990、p.54-61
- 3) M.メルロ＝ポンティ『眼と精神』滝浦静雄、木田元訳、みすず書房、1961、p.275-276、p.286
- 4) M.メルロ＝ポンティ『メルロ＝ポンティコレクション』中山元編訳、ちくま学芸文庫、1999、p.224
- 5) 同書、p.294
- 6) 同書、p.124
- 7) 同書、p.140
- 8) 同書、p.135
- 9) ジャック・ラカン『精神病』（上）ジャック・アランミレール編、小出浩之、鈴木園文、川津芳照、笠原嘉訳、岩波書店、1955-1956、p.63、p.144-145、p.148-149
- 10) M.メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』竹内 芳郎、小木 貞孝訳、みすず書房、1945、p.233
- 11) アンリ・ベルクソン『物質と記憶』合田正人、松本力訳、ちくま学芸文庫、1896、p.109、p.111
- 12) ヴァルター・ベンヤミン『ベンヤミン・コレクション①』浅井健二郎編訳、久保哲司訳、ちくま学芸文庫、1995、p.625-626
- 13) 前掲、M.メルロ＝ポンティ、『眼と精神』

- p.259
- 14) デイディ＝ユベルマン『残存するイメージ』竹内孝宏、水野千依訳、人文書院、2005、p.322
 - 15) M.メルロ＝ポンティ『世界の散文』、滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1969、p.103、p.111
 - 16) 前掲、M.メルロ＝ポンティ『メルロ＝ポンティコレクション』p.222
 - 17) 同書、p.224
 - 18) M.メルロ＝ポンティ『フッサール「幾何学の起源」講義』加賀井秀一・伊藤泰雄・本郷均訳、法政大学出版局、2005、p.97
 - 19) 加藤哲弘「もう一つのイコノロジー アビ・ヴァールブルクとイメージの解釈学」美学会誌、1992
 - 20) 前掲、M.メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』p.165
 - 21) 前掲、デイディ＝ユベルマン『残存するイメージ』p.245、p.328-329
 - 22) 前掲、デイディ＝ユベルマン『残存するイメージ』p.325
 - 23) 同書、p.253
 - 24) 石上七輔著『化粧の民俗』おうふう、1999、p.96、p.100-101
 - 25) 浮ヶ谷幸代『身体と境界の人類学』春風社、2010、p.38
 - 26) 小野康男「デイディ＝ユベルマンと歴史の問題」横浜国立大学人間科学部紀要(8)、2007
 - 4) 福原泰平『ラカン－鏡像段階－』講談社、1998
 - 5) アビ・ヴァールブルク『蛇儀礼』三島憲一訳、岩波文庫、2008
 - 6) 田中純『アビ・ヴァールブルク 記憶の迷宮』〈新装版〉青土社、2011
 - 7) 加藤哲弘「近代の外の芸術へーアビ・ヴァールブルクと比較美術研究ー」美学会誌(46)、1995
 - 8) マックス・ウェーバー『職業としての学問』尾高邦雄訳、岩波文庫、1980
 - 9) 五十嵐嘉晴「G.デイディ＝ユベルマンの芸術論(1)－アナクロニズムの勧めー」金沢美術大学紀要No.46、2002
 - 10) 大原梨恵子『黒髪の世界史』築地書館、1988
 - 11) 杉岡幸徳『奇妙な祭り』角川 one テーマ21、2007
 - 12) 養老孟司『日本人の身体観の歴史』ミネルヴァ書房、1996
 - 13) 多木浩二『ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読』岩波現代文庫、2000

(東萌ビューティーカレッジ専任教員 富金原光秀)

参考文献

- 1) 山本作兵衛『筑豊炭坑絵巻』新装改訂版、海鳥社、2011
- 2) ジグムント・フロイト『精神分析学入門』懸田克躬訳、中公文庫、1973
- 3) ジョナサン・クレーリー『観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』遠藤知巳訳、以文社、2005